ゴースト譚
－人とAIの境界が曖昧な時代の資産運用－

廣　瀬　勇　秀 CMA
（証券アナリストジャーナル編集委員会委員）

タイトルにあるゴーストとは、士郎正宗原作の漫画作品『攻殻機動隊』の中で扱われているそれ（殻の中の「ゴースト」）である。ゴーストについて具体的な説明は作中にはないが、『その人物特有のアイデンティティを与える一種の「魂」とでも解釈すればいい』（櫻井［2007］）ものと解されており、人とAIの境界が曖昧になった世界観の中で、重要テーマとして扱われている。

AIはすでに、最難関といわれる東京大学理科３類の入試問題において首席合格となる点数を獲得（2026年４月27日付　日本経済新聞夕刊）し、さらに人間をはるかに凌駕するスピードで今も進化（成長）している。AIは人間では気付かないようなバグやセキュリティの穴を自律的にかつ容易に見つけて対処できることから、一部の領域ではすでに人間を大きく超越している。

Flynn［2026］は2026年２月～３月に米国と英国でAI活用状況を調査した。それによると、活用や生産性向上効果で先んじる本流のテック・通信業種を除くと、最も影響を受けているのが金融・保険業界である。つまり、本業サービスで最も大きなAIの影響をすでに受けているのが、金融業ということである。

かかる中、資産運用業界での人間の役割はAIにとって代わられるのか？　廣瀬［2023］では、意思決定が重要な仕事である資産運用に対しては楽観的な私見を示したが、最近のAI・ロボティクスの進化で、今ではその楽観度も大きく変わってしまった。一方で、AIの進化にロボティクスの進化が加わること（フィジカルAI）で、資産運用の意思決定を含む仕事にまで大きな影響を及ぼすと考えている関係者は、そう多くはない。まさに、『攻殻機動隊』の世界観が資産運用に影響を及ぼす可能性だ。そこで、このようなAI進化が将来の資産運用や市場にどのような影響を与え得るのか、人の役割は何かについて再考してみたい。

１．予備知識

⑴　哲学的歴史観

『攻殻機動隊』に登場するタチコマ（注１）が興味を抱いた人間のゴーストとは何か、その理解のために、デカルトの心身二元論から始めたい。デカルト［2006］（原書は1641年）は『精神（魂）』

（注１）　バトーという完全義体化したサイボーグが、並立化されたAI戦車のタチコマに「個性がないと面白みがない」と天然オイルを注すこと（共有化されない経験の獲得）で、タチコマたちが個性を獲得し、ゴーストに関心を抱いていく（樹想社編［2008］）。